

上海における京劇の現在

——乾坤一劇場劇中更有劇——

禾 一 瞭

はじめに

上海に居を移し今年（二〇一六年）で十年が経った。この期間、中国は大きな変化を遂げているのと同時に日本と中国の間では様々な問題が起きている。現在は東アジア地域も含めさらに複雑化している。日本はこの中国とどのよう to 接するべきかを再度考えさせられる時期になっているのではないだろうか。世界の工場から世界の消費地へと変化をし「爆買」などという言葉も生まれた。経済が発展すれば文化も同時に発展をする。少し前までは旅行で日本を訪れる中国人のマナーは我々日本人を驚かせる奇行があったが、最近是中国国家旅游局のプロモーションも功をなし

海外旅行をする中国人のマナーもだいぶ良くなってきているようである。日本は悪玉だと幼いころから教えられてきた八〇〜九〇年代生まれの世代は簡単に日本へ旅行に行けるようになり、自身の目で日本を見、日本人と接することで、真実の日本を知り、徐々にではあるが日本を学び自国の発展へとつなげようとしている。私が上海に来た十年前とは大きく変化している。幸い、私は一九九〇年代に北京へ公費留学する機会に恵まれたが、その頃と二〇〇〇年代、そして現在とを比較しながら京劇をキーワードに現在の上海を繙いてみたい。

一 上海での京劇の楽しみ方

上海といえば、日本人は「上海雑技」や「上海ショールンポー」、「外灘（バンド）の夜景」、「オールド上海（魔都）」、年配の方には歌詞にてでくる「夢の四馬路」などが思い浮かぶのではないだろうか。京劇というキーワードは上海ではなく北京を連想させる。しかし、上海にも京劇を上演する劇場は現在も数か所あり、週末には必ずどこかの劇場で京劇が上演されている。北京では観光客向けの京劇というのがあるが、上海では上演がなく、旅行のショートステイでは京劇と接する機会が少ない。それも上海の京劇が連想にくい理由のひとつではないだろうか。上海で京劇が最初に上演されたのは同治六年（一八六七）のことである。ここから上海独自の京劇が発展し今に至る。

京劇は「唱」（うた）、「念」（せりふ）、「做」（しぐさ）、「打」（立ち回り）、「音」（音楽）のほか、鮮やかで華やかな衣装も楽しみのひとつとなる。ただ、京劇初心者にとってのはあの甲高い声には少々抵抗があるかもしれないが、初心者でも分かりやすい演目に触れることで京劇への親しみが湧いてくるのではないだろうか。私も初めて京劇を見た際は、耳を覆いたくなるような甲高い大きな音が劇場内に充滿し、早々に劇場から抜け出したくなったがその場面を我

慢したかいがあり、最後は雑技を彷彿とさせるような連続バク転や数名で行われる槍を蹴る足技（「打出手」）などアクロバティックなパフォーマンスが披露され、一瞬にして京劇の魅力に取りつかれた。最初にどのような演目を観るかも実は重要である。

分かりやすい演目としては、立ち回りやパントマイムの《三岔口》や《秋江》、リボンダンスの《天女花散》、アクロバティックな《孫悟空》などがあり、日本でもよく公演されている。九〇年代にはレスリー・チャン（張国榮）主演の映画『さらば、わが愛／霸王別姫』が日本でも人気を博したことで、京劇《霸王別姫》のダイジェスト版（別れの場面）が日本人には人気のようだ。項羽の「垓下の歌」（力拔山兮氣蓋世、時不利兮騅不逝、騅不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何。力山を抜き氣世を蓋う、時に利あらず騅逝かず、騅の逝かざる奈何すべき、虞や虞や若を奈何せん）、虞美人の劍舞、そして最後の虞美人の自刃までが三十分ほどで演じられるが、この映画を通じ日本人の京劇ファンが増えている。では、ここからは具体的な京劇の楽しみ方をご紹介します。

（一）劇場へ足を運ぶ

ライブは観客と演者の熱気と情熱が会場で一体化しその相乗効果で演目を盛り上げていく。時折発せられる「好」



劇場での集合写真

撮影：徐明

という掛け声や拍手が役者の気持ちを高ぶらせ、演技に、より一層の迫力が加わる。公演終了後のカーテンコールが鳴りやまない場内は何とも言えない満足感を観客に与えてくれる。役者は演じ切ったという充実感と鳴りやまない拍手の音で次の演技にさらに磨きをかけるのであろう。

上海には京劇が演じられる劇場がいくつもある。もつとも有名な劇場は「逸夫舞台」で、ここは歴史が古く民国一五年（一九二六）にオープンし、その後場所の移転などがあり現在は福州路七〇一号に位置する。元々「天蟾舞台」といわれていた。最も大きな劇場はこの劇場の近くにある「上海大劇院」である。ここは海外からのアーティストや劇団の公演が行われ、上海のオペラハウスとも称される。

三つ目に上海京劇院創立六〇周年を記念して昨年（二〇一五年）に新しく上海京劇院のビルが建てられた。その横に劇場が隣接し劇場名を「周信芳戲劇空間」という。四つ目に上海戲劇學院の校内と校門横の校外に二か所劇場がある。その他、二〇世紀の初め京劇が上海で隆盛だったころの「上海共舞台」や「人民大舞台（文明大舞台）」も現存するが、上海雑技や話劇など京劇以外の演目が演じられている。二〇一七年春に『大世界』がリニューアルオープンすると聞いている。公演は不定期に行われるため、劇場のホームページなどから情報を得る必要がある。（チケット購入の方法は後述）

九〇年代後半、私が北京に留学をしていた頃は、「茶館」という、お茶を飲み、おしゃべりをしながら、京劇の一節や「相声」（漫才）、手品や曲芸などが鑑賞できる場所があった。舞台上で熱心に演じている役者はそっこのけで、「聊天」（おしゃべり）に熱中しているから面白い。日本人の感覚からは受け入れ難い空間である。「蓋碗」という蓋のついた陶磁器製の湯飲みを使っているため、陶磁器の当たる「カチカチ」という音や、ヒマワリやカボチャの種を食べる音も時折聞こえてくる。しかし、メインの役者が登場すると茶館内は一気に静まり返り、途端にしゃべり声は、「好^{ハオ}」という歓声と拍手に変わる。現在も北京にはそのような茶館があるようだが、上演中は通して静かに鑑賞するようになったと聞く。上海にも「茶館」という名前が書かれた場所があるが北京の茶館とは異なりお茶やおしゃべりをする空間で舞台は設置されていない。北京の茶館に似た場所としては唯一中華料理レストラン「鮮牆房永安店」がある。ここには食事をしながら京劇や昆劇、越劇（浙江省の地方劇）、評彈（蘇州の弾き語り）の一節が楽しめる舞台があり、定時になるとさわり部分が演じられる。ただ、上演時間は十分程度、じっくり鑑賞したい方には適さない。このレストランはフランス租界時代の古い建物を改装した「老房子」で、入り口には当日の演目が木製の赤い看板に筆書きされている。民国時代にタイムスリップし

たような感覚を味わえる場所で欧米人に人気が高く、接待や観光場所としては適している。

（二）内容を楽しむ

京劇は唱やセリフを中心とした「文戯」と、アクロバットや立ち回りを中心とした「武戯」の二つに分かれる。京劇初心者にとっては「武戯」が親しみやすく、上級者になれば「文戯」が好まれる。京劇を観に行くことを中国語では「聴戯」（劇を聞きに行く）というが、その理由がここにある。「武戯」は初心者向けと書く誤解が生じてしまうが、上級者にも「武戯」は大変好まれる。武将物の戦場での馬上シーン、戦さのシーンなどの立ち回り。孫悟空の如意棒並みに、大きな槍を使って演じるがその槍さばきはキレと迫力があり圧巻である。さらに銅鑼や太鼓の音の響きが臨場感を増すと、演者と観客の熱気は一気に頂点に達する。京劇を観るならこの「武戯」から観ることをお勧めしたいところだが、残念なことに「武戯」の公演回数は「文戯」に比べ非常に少ない。「武戯」の練習は非常にハードであること、練習中に起こる怪我などのリスク、日々の体力トレーニング、出演者全員が出席しての通し稽古に費やす時間がなかなか取れないことなどが原因である。

当然ながら京劇は中国語（北京語）で演じられる。中国語を習得していない外国人にとって物語を理解することは

非常に難しい、さらにセリフが理解できても物語の背景が理解できていなければ、楽しさは半減してしまう。よって予習が必要となる。この予習を通じて、中国古典文学に触れることができ、中国語のセリフを少しでも聞き取りたいという衝動から、中国語学習へともつながっていく。舞台横には中国語の字幕モニターがあり、文字を追いつながらセリフや唱を聞くことができる。興味のある単語はメモし次の日の中国人との会話の中で使ってみるなど一興である。このように京劇を理解することは語学への興味や中国人との交流へと広がり、一石三鳥四鳥にもなる。

物語を理解すると同時に舞台装置に関してもちよつとした基礎知識が必要となる。京劇の舞台は非常に簡素化されており、机と椅子のみ、あるいはそれすらない時もある。観客は演目と舞台装置、役者の動作をみて場面を想像する。机と椅子のみの空間ではあるが、シーンによつて貴族の邸宅になったり、庶民のあばら家になったり、時には戦場での野営場であつたりと、様々に変化をする。場面によつてベッドにも山にもなり、燭台をもつてくれば夜を表現し、燭台に息を吹きかければ、周りは暗闇と変化する。乗馬の場面は馬の鞭のみで表現し、馬はそこには出てこない。その鞭を操り、乗馬や下馬、時には暴れ馬の場面を表現する。

(三) グループチャット

SNSの発達により現在は情報が簡単に入手できるようになった。日本のラインに似た「ウィチャット」(「微信」)の普及のおかげで京劇愛好家グループがそれぞれコミュニティを立ち上げ、毎日京劇談義を飛び交わしている。その他、ウィチャット上では劇場や上海京劇院などの公的機関、役者個人が情報発信を行っている。

私自身は傅希如さん(後述)のファンクラブグループチャットに参加しており、彼が出演する情報や練習風景の写真、京劇に関する知識、演目の粗筋などが発信されている。ファンサービスのため、彼がこのグループチャットに加わり演目の説明を行う企画もあつた。ウィチャットは音声も送れるため、彼自身の肉声が発信されたときは、ファンの興奮や感激を表す単語が多く飛び交つた。ファンサービスにも一役買っている。オフ会には参加したことがないため、このグループチャットのメンバー構成は分からないが、発信している内容や語句、音声から四十代前半からその下の若い世代が多いのではと想像する。SNSの発達により役者との距離も縮まっている。

(四) カメラ愛好家

もともと中国人は写真好きである。あたかも自身がモデ



傅希如さん 《挑滑車》の一場面

撮影：徐明

ルのようにポーズを決め、写真撮影を行っている様子は中国を訪れた方であれば一度は目にした光景ではないだろうか。日本を訪れる中国人観光客の様子を見ると、ガイドの説明はそこそこに、景色の写真を皆がバシバシと撮っている。劇場も同様で客席のいたるところから舞台を撮影している。昔と異なるのは、カメラの性能が良くなったのか、観客のマナーが良くなったのかは分からないが、フラッシュの光が少なくなったことと、カメラではなくスマートフォンを利用して撮影をしている観客が多くなったことだ。劇場内の写真撮影は許可されているが、動画撮影

は禁止されている。スマートフォンで動画の撮影を行っている観客を見つけると、劇場係員がポインターを使い注意を促している。私も一度ポインターの光を当てられ注意を受けたことがある。

このような素人カメラマンとは別にカメラ愛好家も劇場の定位置に陣取り撮影を行っている。彼らの所持している器具は当然プロ級で、素人の私から見てもお高そうなカメラを使い、役者の一瞬一瞬をカメラに収めている。彼らは何となく京劇には全く興味が無い若い世代である。写真撮影サークルを作り、週末は撮影会を行っている。日本や欧米などへの撮影旅行も行っている。京劇もその一つで、原色の派手な衣装も被写体として魅力的なのである。一瞬一瞬の動作をカメラに収めるのも楽しみの一つであろう。決定的瞬間をカメラに収めるためには、演目の内容を熟知しておかなければならず、撮影を通じ京劇の魅力にはまっていくカメラ愛好家も増えているようだ。静止している風景などの被写体では味わえない撮影のスリルがあるのである。掲載の写真は私の友人でプロ写真家の徐明氏による一枚である。彼は中国国内だけでなく、世界各国の風景を撮影している。そんな彼は京劇の撮影の際は緊張感で体が熱くなるそうだ。

(五) 鼯鼠の役者をつくる

鼯鼠の役者をつくることで京劇がさらに楽しくなる。各役者がそれぞれのブログをもっており舞台の様子や日常生活の情報を覗くことができる。熱烈なファンが自身のブログや土豆網などの動画サイトへ舞台の様子をアップしているため、舞台へ足を運ばなくとも鼯鼠の役者をつくることは容易である。また、演じ比べという企画もあり、二〇一六年は下記の題材で四つのグループに分かれて演じ比べが行われた。

演目 《捉放曹》《断桥》

場所 上海大劇院别克中劇場

演者 九月三〇日 李軍(生)、任広平(浄)、董雪萍(旦)

一〇月七日 傅希如(生)、董洪松(浄)、蔡篠澄(旦)

一〇月一四日 田慧(旦)、李昊桐(生)、高明博(浄)

一〇月二一日 史依弘(旦)、陳聖傑(生)、耿露(浄)

※出演者名は出演パンフレット上の順次表記に従う。

このようなイベントを通じて各役者の特徴を容易に比べることができるが、このようなイベントは現在非常に少ない。二〇世紀前半の上海であれば、同日同時に別々の劇場で人気役者どうしの競い合いや興業元どうしの競い合い

など、京劇芸能プロダクションがいくつもあった。京劇が旺盛な時代だったからこそできたことだが、現在はこのような競い合いは少なくなっている。

では、上海ではどのような京劇役者が人気かというと、^{パリ}八〇後^後、^{ジョウリ}九〇後^後の若手男性役者が人気のようだ。観客も女性が多くなり若いイケメン俳優が人気なのだろう。女性客をつかむと男性客も自然と増えるという噂もある。上海で専門にアーティストのコンサートを手掛けている友人の話では、男性アーティストの場合、女性は彼氏を誘いチケットを購入するため二倍のチケット収入がある、逆に女性アーティストの場合は男性客が中心となり、男性は彼女を誘わないためチケットは一枚しか売れない、そのため男性アーティストを積極的に誘致していると聞いたことがある。

話はそれるが、少し前まで日本では「韓流」ブームで韓国のイケメン俳優が多数日本のメディアに露出をし、韓国に親近感を覚えた日本人は旅行先として韓国を選び、韓国関連の商品も非常に売れたようである。それを模し中国のイケメン俳優を「華流」スターとして日本で紹介したことがあったがあまりうまくいかなかったようだ。日本人がイメージする中国芸能人像と一致しなかったのかもしれない。では、イケメンの京劇役者を「華流」スターとしても一度日本で登場させてはどうかと提案したい。京劇とい

うキーワードはすぐに中国を連想することができ、京劇役者としての彼らたちは幼い頃より訓練をつんでいるため、踊り（ダンス？）のキレもあり声質もよい。香港のジャッキー・チェン（成龍）やユン・ピョウ（元彪）なども京劇学校出身者である。私は京劇公演後の打ち上げに参加したことがあるが、化粧を落とした後でも皆男性は顔が整っているし、女性には美人が多かった。ドーランを塗るため五〇代のオジサン役者の肌はつるつる、若手役者は高校球児同様（現在は異なるかもしれないが）、坊主頭が多かったのは印象深い。日本人の女性たちには必ず受けけると思うのだから何なものであろうか。

（六）チケットの購入

九〇年代私が北京に留学をしていた当時、外国人である私は京劇の公演情報を得ることは非常に困難であった。京劇が演じられている劇場は、人民劇場、長安大劇院、前門ホテル内の梨園劇場、湖広会館、正乙祠戲楼などがあつた。ここでの公演情報は劇場に隣接するチケット売り場に張り出されている「紙切れ」に書かれた公演スケジュールをこまめにチェックする必要がある。チケット売り場へ行かないと公演の情報が得られないのである。公演がないと「紙切れ」は張り出されておらず、肩透かしを食らうことも度々あった。留学の途中から『北京晩報』という夕刊に

週一回京劇のスケジュールが掲載されることを知り、『北京晩報』を定期購読するようになった。留学生一階に毎日届けられる新聞は宿舎服務員たちの情報収集にも役かっていた。それでも北京晩報に掲載されないこともあるため、チケット売り場へは相変わらず通っていた。チケットを購入するために劇場へ足を運び、観劇のためにも一度劇場へ行くという、時間がゆつくりと流れていたあの時代だったからこそできたことだと思う。

現在はこんな苦労をしなくとも検索サイトでスケジュールは簡単に入手できるようになっている。劇場専用のホームページや映画などのチケットを販売する代理店のホームページから簡単に情報が入手でき、ホームページ上でチケットの購入もできるようになった。支払いも「支付宝」（アリペイ）を使い簡単にできる。

二 新編（新作）京劇の事情

新編京劇というと、革命現代京劇を思い浮かべる方も多いと思うが、シェイクスピアの脚本を基にした京劇版ハムレット『王子復讐記』や上海京劇院ですでに十年以上上演されている連台本戯『狸猫換太子』、神話京劇『盤糸洞』、歴史京劇『乾隆下江南』『曹操与楊修』など多数存在する。最近では中国共産党建党九五周年を記念して新たに

作られた《浴火黎明》がある。共通していえることは、舞台装置が伝統京劇と比べ豪華で、シンセサイザーなど伝統京劇にはない電子音や、一幕が取り入れられている。そのため京劇初心者や中国語が分からない観客も舞台装置の雰囲気や音楽を聞きながら物語の大枠が理解でき、楽しめるものとなっている。新編京劇とはどのようなものか、実際に鑑賞した演目をご紹介します。

二〇一六年二月一〇日上海逸夫舞台にて日本人の友人数名と西遊記の一節、上海京劇院の創作神話京劇《盤糸洞》を鑑賞した。友人の中には中国語学習初心者、京劇初心者も含まれる。軽快な音楽とともに幕が開く、蜘蛛の精（武旦の妖怪が親分）たちの登場、舞台上の照明は暗く薄い緑色のスポットライトが蜘蛛の妖怪たちを照らしている。その後場面が変わり三蔵法師一行が現れる。幕開けからここまで数分、「これは京劇か」と耳を疑うような音が流れ、照明も独特、現代劇を思わせるような演出となっている。銅鑼や京胡の音がない幕開けに少し違和感を覚えながら、西遊記お決まりの孫悟空の妖怪退治へと話は進んでいくのだが、終了後友人たちの感想は「想像をしていた京劇と違い、分かりやすかった」「孫悟空の立ち回りはもちろんすごいが、蜘蛛の女王の演技も妖艶であった」「京劇といえど甲高い声の特徴で耳をふさぎなくなるが、今回の声は耳あたりが良かった」「中国語が理解できればさらに楽しめ

た」「また京劇をみてみたい」など総じて好評であった。舞台装置が豪華であることはもちろんだが、マジックの要素を入れ猪八戒が二つに切断されてしまう場面やモノマネの要素を入れ一人の女優が四大名旦流派（梅蘭芳、程硯秋、荀慧生、尚小雲）の唱比べ、女性に化けた孫悟空を演じる女性役者の猿のしぐさ、川劇（四川省の伝統演劇）の変臉を取り入れるなど、伝統京劇にはない要素を多数取り入れ、京劇初心者でもわかりやすく、中上級者でも唱の見せ場、激しい立ち回りなど退屈しない内容となっている。《盤糸洞》は一九八六年に初演があり現在まで六〇〇回以上の公演が、中国はもとより世界各地でされており、その間に何度も改良が行われ、現在の完成された演目となっている。

二〇一六年に創作された《浴火黎明》は一九四八年から一九四九年中華人民共和國建國前後の重慶が舞台となっており、国民党軍の拷問や収容所内での様子などが描かれ、最後は国民党軍に捕らえられている共産党軍が全員射殺されて幕が閉じるという歴史京劇である。こちらは、原色の派手な衣装ではなく、解放前後当時の衣装（軍服）を身にまとい、収容所が舞台となっているため全体に地味さを感じる。音楽や舞台装置からは現代劇をみているような印象であった。未完の部分が多いようで、中国人の「戯迷」（京劇ファン）たちの感想は手厳しいものもあった。これ

から何度も改良が加えられて新編現代京劇として完成された演目になっていくのであろう。《盤糸洞》も初回公演の際は同じだったのであろうと想像する。これは伝統京劇にもいえることで、齊如山のアドバイスを入れ梅蘭芳が動作を加えたことで大きな成功を収めたことは有名で、映画『花の生涯 梅蘭芳』にもこの場面は出てくる。固定観念から脱却し演技を変えたことで京劇に対する考え方が豊富になり、時代に合ったよりよい京劇へと進化していく。ただ、『浴火黎明』は政治色が強い内容のため、成熟版の『浴火黎明』を見ても日本人の反応は賛否分かれるところであろう。

二〇一六年はシェイクスピア没後四〇〇年にあたるため京劇版ハムレット『王子復讐記』が多く上演されている。私は最初、「ハムレットの京劇」と聞き理解できなかったが、実際に見てみると、京劇になっていた。一〇月にはカナダのトロントにて上演されることが決まっている。本家のハムレットもチャンスがあれば観てみたいと思った。

京劇といえば中国の古典を題材にした演目が大部分を占めるが、このように海外の古典を題材にした京劇が編纂されることは京劇もグローバル化している証でもあり、劇作家に求められる教養レベルも高いものとなっている。情報化の社会、戯迷たちの教養レベル、情報収集レベルも上がっており、劇作家、演者、戯迷の三者で意見交換が行

える場所も増えてきた。京劇の伝統を守りながら、時代に適応した新たな挑戦が京劇の世界でも行われている。

三 在上海の日本人京劇ファン事情

現在、在上海日本国総領事館に登録がある三カ月以上の長期滞在の日本人は六万一千一百四十人（二〇一五年一月一日現在、外務省ホームページによる）、上海総領事館は上海市、江蘇省、浙江省、安徽省、江西省を管轄しており、それら地域の合計数である。二〇一二年のピーク時七万八千六百二人と比べると約一万八千〇〇〇人の減少である。上海には五万人弱が現在長期滞在をしており、ピーク時と比べ約一万人以上減少していると聞く。減少した理由は様々あり本題より外れてしまうのでここでは詳しく述べないが、日本のメディアで度々報道されている大気汚染、食の安全や就労ビザの取得基準が年々厳しくなっていること、現地化という名目での日本人駐在員の削減、物価高騰による生活難などがある。この現象により在上海の日本人京劇ファン層も変化をしている。

（一）日本人ファン層の変化

中国での駐在イメージは一部の親中派や知中派を除くと今も昔もあまり良くない。二〇一六年三月一二日に内閣府

が発表した「外交による世論調査」では中国に「親しみを感ぜない」「どちらかというと感じない」を合わせて八三・二%、中国に「親しみを感ぜる」人は一四・八%というデータがある。こんな状況下で中国に派遣され、彼の地で言葉も文化も違う社員たちをまとめるご苦労は並大抵なことではないとお察しする。日本側との折衝もご苦労が多く、中国の偏った報道による知識を基にした日本本社のスタッフと中国の駐在員たちとは連日バトルが繰り返され、夜は接待や異業種交流会などの食事会、土日はゴルフや出張者の市内観光のお付き合ひ、落ち着いたかと思えば予期せぬアクシデントの発生、日本人駐在員の人員削減による負担増など休む暇がないと聞く。逆に帯同の奥様は家族ビザでの滞在で収入を得る労働は法律上禁止されているためパートなどのアルバイトはできない。その代わりに中国語の語学学校へ通ったり、奥様同士でお茶会をしたり、中国画や二胡などの習い事を始めたりと中国文化を体験されている。ただし、現在は事情が異なり、先にも述べたような理由とも連鎖し帯同家族の帰国ラッシュ（少し大げさな言い方かもしれないが）が続いている。このため、駐在員奥様を対象にしている文化サークルの教室は閑古鳥が鳴いている状態へと変わってきた。しかし中国人たちが豊かになつてきたことで、中国人の親たちが子供たちをそのような教室に通わせるようになり、提供側の対象国籍が変わつ

てきている。駐在員は相変わらず忙しい。

駐在員の年齢層も変化している。私が上海に来た二〇〇六年当時は白髪交じりの駐在員が多かったし、京劇など中国文化に触れている日本人の年齢層は高かった。しかし現在は平均年齢も若くなり、三〇代で駐在をしている方々も多くなつてきている。忙しい業務の合間を縫って中国文化や中国人との交流に触れることで中国を理解し、ビジネスの上で役立てようとしていている方も多く、皆さん頑張っておられる。京劇鑑賞はそんな駐在員にとっても非常に意味があることで、中国人の思考が凝縮されている京劇は中国人を理解するうえで役に立ち、中国の古典文学も学ぶことができる。あの大きな銅鑼や京胡の音楽を聞くことでストレス解消にもつながる。

(二) 厳慶谷上海日本人後援会

上海京劇院に所属する厳慶谷さん、一九七〇年生まれの国家一級演員、上海市戲劇家協合理事、道化役（丑）や孫悟空など難易度の高い役が専門、日本での公演や留学経験があり日本語が堪能、留学中は狂言を研究、またサントリーのウーロン茶CM（一九九〇年、一九九三年）にも出演されている。日本の懐メロを爽やかな若い夫婦が中国語で唱っているサントリーのCMを目にされたことがある方も多いのではないだろうか。この厳さんの上海後援会が日

本人を中心として二〇一五年新たに設立された。以前も敝さんの後援会は存在していたが、事務局の日本帰任などがあり、一時中断、その後上海に八店舗を展開する蕎麦屋「紋兵衛」の土肥社長が発起人となり活動を始められた。会員数は約百名、会員の構成は上海で働いておられる方や専業主婦の方が中心となっている。

二〇一六年は申年ということもあり、敝氏十八番の孫悟空が連台本戯という形で演じられている。公演の前には日本人後援会会員を対象に勉強会が開かれ、演じられる劇の見所や概要の説明が行われる。上海京劇院で練習風景を見学する企画も実施されている。普段着でメイクをしない役者さんの練習風景を拝見できることは事務局のご尽力の賜物である。

(三) 上海京劇愛好会

敝慶谷上海日本人後援会とは別にもう一つサークルがあり、これが、上海京劇愛好会である。こちらは京劇というキーワードで観劇ももちろん行っているが、舞台裏見学や中国人京劇ファンたちとの交流、公演情報の交換などを行う。日本人を対象にはしているが、日本語が理解できる中国人の会員も在籍している。そのため、中国人会員が所蔵している貴重なコレクション自慢の交流会なども実施している。

四 公演事情

まずは二〇一六年上海京劇院の演出プログラムをみてみたい。(上海京劇院発行の演目表を参考。出演者名は割愛)

(一) 三大演出シリーズ

(1) 上海京劇院実力派演出

① 三月一八日 十全十美——上海京劇院中青年芸術家演唱会

② 三月一九日 紅鬃烈馬(平貴別窯、武家坡、大登殿)

③ 三月二〇日 紅樓二尤、鬧宴、罷宴、文昭関、貴妃醉酒

④ 四月三〇日 白蛇伝

⑤ 五月一日 金龜記

⑥ 五月二日 将相和

⑦ 六月三日 金山寺、断桥、雷峰塔

⑧ 六月四日 鳳還巢

⑨ 六月五日 玉堂春

⑩ 六月一七日 桑園寄子

⑪ 六月一八日 秦瓊売馬

⑫ 六月一九日 双獅図(鬧花灯、法場換子、举鼎観画)

⑬ 一〇月一日 謝瑶環

⑭一〇月二日 銅判官

⑮一〇月三日 魚藻宮

⑯一〇月四日 (昼) 審頭刺湯

⑰一〇月四日 (夜) 牛皋下書、挑滑車

(2) 武戲專場

①九月八日 龍潭鮑駱

②九月九日 金錢豹、取金陵、金翅大鵬

③九月一〇日 小商河、武松打店、狀元印

(3) 夢想新相棒シリーズ

①一二月四日より六日 四台演出 (演目未定)

(二) 二大特別企画

(1) 「大聖来也」特別企画

①一月一日 齊天大聖

②五月一四日、五百年後孫悟空

③五月一五日 五百年後孫悟空

④九月三日 真贋美猴王

⑤九月四日 真贋美猴王

⑥一二月三十一日 鬧天宮、借扇、金刀陣

(2) 新作劇特別企画

①六月二〇日 新作現代京劇《浴火黎明》

②七月三日 新作現代京劇《浴火黎明》

③九月一五日 月光下的行走 二〇一六版

④一二月九日 蘭陵王

(三) 主題演出

(1) 「上海青年文芸家育成計画」シリーズ

①「王珮瑜」専場演出

二〇一七年一月一日 造白袍、哭靈牌、連營寨

二〇一七年一月二日 汾河灣

二〇一七年一月三日 朱砂痣

②「金喜全」専場演出

一二月九日 蘭陵王

③「傅希如」専場演出

四月一〇日 大保国、探皇陵、二進宮

五月二八日 洪羊洞、挑滑車

八月二七日 楊家將

一二月一七日 響馬伝

④「藍天」専場演出

六月一日 戰太平

八月一三日 法場換子、別母乱箭

一〇月三〇日 失街亭、空城計、斬馬謖

一二月三日 伍子胥

これらは主に上海京劇院の逸夫舞台での公演情報で、その他の劇場、貸切公演、北京京劇院や天津京劇院などほか

の劇団の上海での公演情報は割愛しているため右記の二倍から三倍の数が一年に演じられていると想像する。(二〇一六年九月時点による)

この演目表で気になるのは「上海青年文芸家育成計画」シリーズである。これは上海市共産党委員会宣伝部が若手育成のために行っているもので、上海京劇院では四名の役者が選ばれている。四名の役者をそれぞれ見てみると、

王珮瑜(女) 一九七八年生まれ、老生、国家一级演員

金喜全(男) 一九七八年生まれ、小生、国家一级演員

傅希如(男) 一九八一年生まれ、武生、老生、国家一级演員

演員

藍天(男) 一九八四年生まれ、老生、国家一级演員

王さんと金さんは上海での公演は少なく、地方公演が多いようである。傅さんと藍さんは逆に上海での公演が多い。三〇代の彼らたちは京劇の公演だけではなく、大学生に対する京劇入門講座や一般人向けの講演、京劇普及のプロモーション用DVD制作、ブログの発信など多岐にわたった京劇普及活動を行っている。上述の京劇版ハムレット《王子復仇記》は京劇普及の一環で上海戲劇学院内の劇場でみせていただき、この日から傅希如さんと私の交流が始まった。

彼は大学など様々な場所で京劇の講義、公演を行う傍ら、自身の練習、上海公演、地方公演、今年はアメリカやカナダでの海外公演、アマチュア京劇団の唱指導など非常に忙しい毎日を送っている。これらの情報は彼の追っかけやファンクラブの方々がSNSを通じ様々なところで毎日発信されている。この点は日本の芸能人と同じだ。当初、私はミニ堂会なるものを聞き、食事をしながらインタビュー、そのついでに一節唱っていたころなど一人で密かに計画を立てていた。中国スタイルで、まずは食事、そのあと商談(今回は商談ではないが)と考えていたが、私の想像以上に忙しい彼にお願いすることはできなかった。公演前や後の舞台裏では会うことができ、彼は気さくに話しかけてくれる。

五 中国人京劇愛好家の事情

北京天壇公園など北京の公園を歩いていると、二胡の音が聞こえてくる。音のほうへ近寄ってみるとそこは京劇の唱の練習場となっており、オジサンやオバサンたちが自慢の喉を聞かせている。こんな風景を北京留学中には目にすることができた。現在、上海では日々の生活が忙しく、のんびり公園を散歩するという余裕がないため、まだ一度も北京のような光景を見たことがないが、戯迷の中国人友人

からの情報によると、上海には「票房」（アマチュア京劇団）が二〇〇団体ほどあるそうで、毎週の練習会や定期的な発表会が催されているようである。上海京劇院も京劇愛好者たちに京劇教室を主宰している。二〇一六年一〇月より新たに始まる京劇教室は次の通り。

傅希如（老生一班）《四郎探母》

于輝（老生二班）《鴻門宴》

陳聖傑（老生三班）《曹操与楊修》

董洪松（花臉班）《趙氏孤兒》

朱菊麗（青衣一班）梅派《天女散花》

金蓉（青衣二班）梅派《貴妃醉酒》

田慧（青衣三班）梅派《鳳還巢》

高紅梅（青衣四班）梅派《白蛇伝遊湖》

隋曉慶（青衣五班）程派《鎖麟囊》

蔡曉澄（青衣六班）張派《伶香伴》

董雪平（青衣七班）張派《狀元媒》

何蕾（兒童花旦班）《拾玉鐲》

胡靜（老旦班）《釣金龜》

楊亜男（武旦班）《扈家莊》

呂弓長和（京胡班）《基礎班》

※毎週一回、全一二回の講座があり上海京劇院横の劇場で卒業発表会が開催される。

これを見ると「花旦」班が多い。女性の参加者が多いためだろう。講座を行う先生方は実際に舞台上に上がっている現役の役者である。通常であれば劇場の客席から見ることできても直接会話をするチャンスはなかなかない方々である。有名な役者になればなるほど雲の上の人となってしまうが、これでは京劇自体も雲の上の演劇となってしまう京劇ファンや観客が少なくなっていく。役者と観客の距離を近くすることで京劇を身近に感じてもらい、体験できる場所を提供することで京劇の普及を上海京劇院は進めている。「追っかけ」の京劇ファンにとっては非常に貴重な時間であり一講座約一時間三〇分は至福の時であろう。その証に通常「老生」は男性が演じるが、「老生教室」には生徒の半分ほどが女性であり、講師を務める役者のファンがほとんどである。

授業を一度見学させていただいたが、一流の役者が教えておられるため要求が非常に高く、厳しい。声の強弱、息継ぎの仕方などワンフレーズの微妙な部分ではあるが、京劇の繊細さが学べた。また、ここは上海、日本人にとっても難しい「そり舌音」の発音練習を上海人に対しても行っている。この場面はなんだか学生時代の中国語の授業を思い出し笑えた。講師は口三味線ならぬ、口伴奏と割りばしのような棒切れを机に当てて音頭をとり唱の指導を行っている。口伴奏といえども、声質の良い現役役者が発する音



化粧前の役者たち 武旦の馮蘊さん（前列中央）

撮影：徐明

のため、聞いている方は聞きほれてしまう。録音をしている生徒さんもいた。途中の休憩中は講師と生徒のツーショット写真撮影も行われていた。廊下で一人大きな声を出し練習をされている生徒さんもおられた。授業の終盤は一人ずつ皆の前で唱を披露し講師から指導を受けその後授業は終了となる。

このように京劇愛好家にとって京劇の楽しみ方は写真撮影であったり、唱を習ったり、京劇の関連グッズを集めたり、仲間同士で京劇談義を行ったりと様々である。

おわりに

伝統を受け継ぎ、守り、次に引き継ぐということは非常に難しい。日本の伝統芸能は世襲制でつながれていくが、中国は世襲制ではない。師匠から弟子へ孫弟子へと血縁のないものへ引き継がれていく、どちらが良いのかは私には分からない。現在は情報過多になり役者の負担も大きくなっている。昔であれば娯楽は少なく、一極集中し究極の逸品が出来上がっていた。現在はやるべきことが多すぎる。中国だけではなく海外の情勢も学ばなければならぬ。平均寿命が長くなった分学べる時間が増えたが、雑音も多くなった。そんな雑音の中には清音も混じっている。その清音を取捨し時代に合った作品ができて、観客側の

理解度が低ければ後世に残る作品にはならない。百年後二百年後に評価をされても、当事者たちには不幸である。生きているうちに花は見たいものである。そのためには観客側も学ぶ必要があるのと同時に応援も必要だ。

中国は破壊文化だ、と聞いたことがある。「芸術は爆発だ」という有名な言葉が日本にはあるが、中国では爆発した後、何が残ったのであろうか。失われてしまった文化は多い。その失われた文化は日本で洗練され、現在は逆輸入され中国の人々の余暇を楽しませている。幸い、京劇は政治にも利用され生き延びてきた。日本に渡ることもなく、独自の発展を遂げているまさに「国粹」である。この京劇を理解することは中国人を理解することであり、中国ビジネスにも通じる。中国人の笑いのツボや交渉術など学べるところは多い。例えば、日本でも公演が多い京劇《秋江》は尼僧と船頭のユーモア溢れる内容だが、船賃の交渉や出港までの先延ばし方法など日本人では想定外の場面が出てくる。このような場面が笑えるのだが、中国にいとビジネス上でも同じような場面を何度も体験することがある。したがって多くの京劇に触れることで中国人とのコミュニケーション法が自然と身についてくることを私自身が体験した。

この先京劇がどのように発展するのか、新しい京劇へと変えていくことは非常に難しいことではあるが、京劇の原

則ルールを守りながらも変えていかなければ、京劇も過去の遺産となってしまう。約二十年前北京の劇場では《群英会》《烏盆記》《霸王別姬》《四郎探母》など梅蘭芳や馬連などを連想するものが多く演じられていた。現在は私が昔なじんだ演目が演じられることが少なく、古典ではあるが初めて目にする演目が多い。故人と比較される演目ではなく、新たに自分たちの色を出すための試みと私には思える。これも新しいものへの追求の変化であろう。

最後に、このような発表の機会を与えていただいたことに対し愛知大学樋泉先生には感謝申し上げます。また、写真のご提供をいただいた徐明さん、上海京劇院の傅希如さんはじめ多くの方から情報をご提供いただきまとめることができました。改めて感謝を申し上げ筆をおきます。

参考文献

《日本語》

芥川龍之介『上海游記 江南游記』講談社、二〇一四年

加藤徹『京劇——「政治の国」の俳優群像』中央公論新社、

二〇〇二年

加藤徹『梅蘭芳——世界を虜にした男』ビジネス社、二〇〇

九年

徐城北『京劇の世界——見て読む中国』東方書店、二〇〇六年

樋泉克夫『京劇と中国人』新潮社、一九九五年

藤野真子『上海の京劇——メディアと改革』中国文庫、二〇一五年

魯大鳴『京劇役者が語る 京劇入門』駿河台出版社、二〇一二年

〈中国語〉

青木正児著、李玲訳『品梅記』文化芸術出版社、二〇一五年

谷粮編『梅骨芳華 梅蘭芳極限片集』浙江人民美術出版社、

二〇一六年

梁燕主編『梅蘭芳与京劇在海外』大象出版社、二〇一六年